

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720196

研究課題名（和文）朝鮮近世の交通に関する歴史地理学的研究

研究課題名（英文）the historical geographical study of the transport and communications in the early modern Korea

研究代表者

長森 美信（NAGAMORI MITSUNOBU）

天理大学・国際文化学部・講師

研究者番号：50412135

研究成果の概要：研究代表者の研究関心は近世朝鮮における交通、即ち人と物の動きにある。交通のあり方を探るためには交通路そのものについて知る必要がある。しかし学界は未だ朝鮮近世史資料にみえる地名の現地比定を学術的水準で行い得るだけの歴史地図を持っていない。本研究では朝鮮歴史地理研究の基礎的作業として、関連資料の所蔵・刊行状況について調査した。また既刊史資料にみえる朝鮮近世の地名を収集し、その現地比定を行った上で当時の交通路の復元作業を進めつつ、その交通路を利用した人と物の動きについて考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,600,000	0	1,600,000
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	240,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：朝鮮史、朝鮮近世、歴史地理学、交通、古地図、地誌、邑誌

1. 研究開始当初の背景

歴史学において、史料上に見える地名と地図との対照作業がいかに重要であるかは多言を要さない。朝鮮地域の歴史地図といえば、松田寿男・森鹿三編『アジア歴史地図』（平凡社、1966年）所収の地図数葉が挙げられるくらいで、大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国でも学術的研究にたえうる水準の歴史地図はいまだかつて作製されたことがなかった。

また朝鮮近世の古地図や地志等、歴史地理

関連資料がどのように現存し、どのような機関で所蔵管理され、どのような資料がどのような形で刊行されているのかについてを整理する作業がまず必要な状況にあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の3点に要約される。

(1) 朝鮮近世の歴史地理関連資料を収集、整理する。朝鮮近世の古地図、当時作成された邑誌等の地理書の現存当否、所蔵・管理の状況について知ることは容易なことではない。

韓国の自治体や文化院などの公機関が発行している現代版邑誌ともいうべき地誌等の刊行状況も含め、朝鮮近世歴史地理関連資料の現存状況について整理する必要がある。

(2) 朝鮮近世の交通路を地図上に復元する。朝鮮近世の地理書に見える地名を、当時の古地図や植民地時代の地形図、現在の地形図等を利用して現地比定を行うことが重要である。地図で確認できない地名については、現地の有識者に情報提供を請うだけでなく、現地調査を行って補完することが望ましい。

(3) 当時、交通路を通してどのような人と物の動きがあったのか、その実態を考察する。研究代表者はかつて朝鮮王朝の国家権力存立の前提に一定程度整備された交通体系の存在があったことを指摘した。本研究では(2)で述べた歴史地図の作製とともに、当時の人と物の移動体系、とりわけ貢納・進上・賑恤など国家と地方の支配関係を担保した物資の輸送体系を構造的に理解すべく事例研究も並行して行う。

3. 研究の方法

(1) 日本・韓国を中心に国内外の図書館等、資料所蔵機関が発行する目録等により、朝鮮近世歴史地理関連資料の現存可否と影印刊行等の状況を確認するとともに、韓国の自治体や文化院等による地方誌資料の刊行状況についても調査を行った。

(2) 各邑誌、『輿地図書』、李重煥『捩里志』、金正浩『大東地志』、申景濬『道路攷』、徐有架『林園経済志』、洪鳳漢ほか編『増補文献備考』等、主として18～19世紀にかけて著された朝鮮近世の地理書のうち、すでに影印本等が公刊されているものを中心に地名を収集した。

(3) 近世朝鮮で作成された地方地図である『海東地図』『朝鮮後期地方地図』(ソウル大学校奎章閣)、李燦編『韓国の古地図』(汎友社)と朝鮮総督府陸地測量部作製の5万分の1地形図および韓国国立地理院発行の5万分の1地形図を地域別に対比分析しつつ、(2)で収集した地名に対する現地比定を進め、確認できた地名を地図上に落として当時の交通路の復元作業を行った。

(4) 上記交通路を利用した人・物の動きの一例として凶年時の賑恤穀の輸送実態について研究を進めた。また船を用いて海上活動を行っていた朝鮮人の漂流事件に注目し、18世紀前半に琉球に漂着した朝鮮人について事例研究を行った。また、近年韓国で刊行され

た『耽羅文献録』所載の朝鮮漂着船の記録を収集し、当時の海上交通路とその交通路を利用した人々の位相と彼らの海上活動の分析を進めた。

(5) 朝鮮から日本への船を用いた海上貿易の主要交易品であった朝鮮人蔘(人蔘)が日本でどのような存在であったのかを江戸時代後期の状況を中心に考察した。

4. 研究成果

(1) 植民地時代の日本(朝鮮総督府)による調査報告を含め、国内外で刊行された朝鮮歴史地理関連資料の所在状況について調査し、朝鮮地名に関する既存研究に対する分析を行った。その結果、植民地時代に朝鮮総督府等が行った朝鮮地名に関する研究(この時期の複数の研究が『朝鮮地名研究集成』(草風館、1994年)に復刻収録されており便利である)の批判的再評価を行うべきであることが分かった。

(2) 朝鮮近世交通路の復元のための基礎作業として、既刊資料にあらわれる朝鮮近世の地名を収集した「前近代朝鮮地名データベース」の作成を進めた。その成果の一部は論文「朝鮮近世の海路」として『朝鮮学報』第199・200輯合併号(2006年)に発表した。同論文では、まず朝鮮半島全域にわたって当時の海路を記した申景濬『道路攷』を中心に、同時期の史料上にあらわれる地名の現地比定を可能な限り行い、その後、当時の沿海航路を地図上に復元した。あわせて沿海航路上の特筆すべき地域等についても言及をした。同論文でおこなった作業は、①海上交通が商品流通経済発展に重要な役割を果たしてきたこと、②五百年にわたって朝鮮王朝国家が存立できた前提に海路による輸送体系の存在があったこと、③船による交通体系が朝鮮王朝の国家財政と地方支配を支えていたこと、という朝鮮時代の海上交通史研究がもっていた重要性にもかかわらず、その基礎となる考察、特に海路および浦口に対する歴史地理学的研究蓄積は皆無に近いという現状から進めたものである。ただし、2009年6月現在すでに誤りも判明しており、より精緻な地図の作成が求められている。

(3) 税穀・賑恤穀等、王朝政府主導による穀物の全国的流通体系について研究を進めた。その成果の一部は、論文「一八世紀朝鮮における対済州賑恤穀の輸送実態」として『天理大学学報』第214輯(2007年)に発表した。同論文は、18世紀の済州地域を対象を絞り、大規模な賑恤穀輸送がどのように行われていたのかを事例分析を通して明らかにしよ

うとしたものである。朝鮮王朝の賑恤策（凶年時に民衆が餓えぬよう食糧となる穀物を官が支給するなどした飢饉対応策）についての研究は、制度史あるいは経済史的な側面から一定の進展を見せている。ただし、賑恤策の実施方法は時代、地域によって大きく異なり、その時代、地域に即した具体的な賑恤運営の実態については未知の部分が多い。たびたび凶年に襲われた済州島には毎年のように賑恤穀が陸地（半島本土）から輸送された。その量は、少ないときで数千石、多いときには3万5千石を超える規模になった。数千～数万石規模の穀物輸送は、その供出地にとっても、また輸送を担う主体にとっても極めて大きな負担であった。同論文では、賑恤穀輸送体系を構造的に把握するための基礎作業として、主に18世紀の済州地域に対する賑恤穀の輸送実態を事例分析の手法を通して考察した。その結果、賑恤穀輸送の方式は一律でなく、その時々状況に応じて臨機応変な対応がとられていたことが確認できた。

(4) 当時の交通体系の構造的把握のためには、交通路の復元だけでなく、交通手段、なかでも船舶に関する研究をさらに進展させる必要があると同時に、船を操って当時の海上交通を担っていた人々の姿を少しでも明らかにしていく作業が緊要である。『朝鮮史研究会会報』第164号に発表した「朝鮮近世の「船人」について」（2006年）は、様々な場面で船に乗りこみ、その運航を担った人々を仮に「船人」と総称し、彼ら「船人」の朝鮮近世社会における存在形態とその社会的地位について考察した。その結果、①船軍・水軍、漕軍のように「役」として船に乗ることを余儀なくされた人々の社会的身分は、本来他役に充定された良人と異なるところのないものであったにも拘わらず、その役の厳しさから、時代を経るにつれて、彼らの社会的身分が下落の一途をたどり、「身良賤役」とよばれる特殊な存在として定着するにいたったこと、②私船人の社会的身分は17世紀中頃までは公私奴婢がその大部分を占め、一般良人が船の運航に携わることはなかったが、17世紀中頃以降、私船人における良賤2身分の逆転現象が起こること、③ただし17世紀中頃以降、船に乗ることになった良人たちは、「良」のなかでも貧窮あるいは凶年等で生活の道が絶たれた社会最下層の人々であり、船人たちの社会的地位は依然低く、卑賤視される存在であり続けたことなどを指摘した。

(5) 18世紀当時の朝鮮人の海上活動、移動範囲とルートを調査する中で、18世紀半ばに海難事故に遭い、当時の奄美諸島徳之島に漂着

した朝鮮人の記録を発見し、これをもとに「一七三九年朝鮮漂着民が見た琉球」を『南島史学』第68号（2006年）に発表した。同論文は、天理大学付属天理図書館所蔵の『増補耽羅誌』巻九「漂船接送・異国間情」に見える記事のうち、1739年（英祖15）に琉球に漂着し、北京経由で帰国を果たした朝鮮済州人の事例に注目し、他の朝鮮史料と対照しつつ、彼らの漂流の経緯を明らかにし、彼らが「見た」18世紀半ばの琉球の姿について考察したものである。その考察を通して、①漂流関連史料の価値と問題点、②東アジア海域における海難民の漂着が日本、琉球、朝鮮、中国という四地域間の外交と深い関わりを持っていたこと、またそれゆえに、薩摩の蔵入地である徳之島に漂着した朝鮮人が琉球、福建、北京経由で送還され、朝鮮漂流は最後まで自分たちは「琉球領」徳之島に漂着したと信じて疑わなかったという事態が起こりえたこと、③朝鮮漂流はあくまで朝鮮を基準に朝鮮人の目で異域——徳之島・琉球を見ていたという点について論じた。ただし、朝鮮漂流民が琉球国内を自由に動き回ることができたとは考えられず、ここで紹介した琉球の風俗に関する記述の全てが事実とは限らないという点を再度強調した。

(6) 朝鮮王朝はいわゆる海禁政策をとったため、原則として朝鮮人が国外に通交することはなかった。そうしたなかでほぼ唯一、船を用いて通交を継続したのが日本への外交使節であった。対日外交使節は、徳川将軍のいる江戸まで往来した「通信使」と対馬をより頻繁に往来した訳官使（問慰使）があった。沿海を航行した一般船舶と外洋船たる通信使船・訳官使船との船舶構造の比較を行うべく通信使の使行録の収集、分析を進めるなかで、天理大学付属天理図書館が所蔵する『東槎録』乾坤二冊が重要な記録であることが判明し、これについて国際日本文化研究センター第29回国際研究集会（2006年）にて発表を行った。対日使節の使行録としては『海行摠載』所収のものが有名だが、『海行摠載』に収録されていないものが数多くあることは周知のとおりで、管見の限りでは、本書もまたこれまで学界に知られていなかった使行録の一つであること、本書が癸未（英祖39・宝暦13・1763）年の第11次通信使の使行録であること、また唯一ハングルで書かれた使行録として有名な『日東壯遊歌』の作者である金仁謙が漢文で著したもう一つの日本使行録である可能性を指摘したものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 長森美信「朝鮮近世海路の復元」『朝鮮学報』第 199・200 輯合併号、151～190 頁、2006 年、査読有
- ② 長森美信「一七三九年朝鮮漂着民が見た琉球—天理大学付属天理図書館所蔵『増補耽羅志』の漂流関係記録をめぐって—」『南島史学』第 68 号、19～33 頁、2006 年、査読有
- ③ 長森美信「一八世紀朝鮮における対済州賑恤穀の輸送実態」『天理大学学報』第 214 輯、17～36 頁、2007 年、査読有

[学会発表] (計 3 件)

- ① 長森美信「一七三九年朝鮮漂流民が見た琉球—天理大学付属天理図書館所蔵『増補耽羅志』の漂流関係記録をめぐって—」南島史学会大会、2006 年 6 月 10 日、於 関西大学
- ② 長森美信「天理大学付属天理図書館所蔵『東槎録』について—金仁謙『日東壮遊歌』との関連から—」国際日本文化研究センター第 29 回国際研究集会、2006 年 10 月 19 日、於 国際日本文化研究センター
- ③ 長森美信「일본의 있어서의 朝鮮人蔘(日本における朝鮮人蔘)」고려인삼의 역사 문화적 가치 재조명을 위한 국제학술 심포지엄 (高麗人蔘の歴史・文化的価値再照明のための国際学術シンポジウム)、2007 年 9 月 16 日、於 大韓民国 ソウル 歴史博物館講堂、大韓民国忠清南道主催・国学学院院主管

[その他]

- ① 長森美信「朝鮮近世の「船人」について」『朝鮮史研究会会報』164 号、1～4 頁、2006 年 6 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長森美信 (NAGAMORI MITSUNOBU)
天理大学・国際文化学部・講師
研究者番号：50412135